

熊谷は中山道を通じた産業の流通や文化交流の要衝として栄える中で、「学び」に対する関心も高く、私塾や寺子屋が多く存在していた。江戸の儒学者である寺門静軒が開設した妻沼の「両宜塾」や大里・根岸家の「三餘堂」、竹井澹如らによる「折遼学舎」や教員養成所の「暢発学校」といった教育機関も多く、若人を育成した。近代の熊谷を支えた多くの先覚者はこれらによって育まれたのである。

明治時代になると熊谷、大里、妻沼、江南の各地域に学校が設立された。その後、尋常小学校や高等小学校の設立へとつながり、地域の礎となる教育制度が拡充された。明治二十一年（一八七八）には、弥藤吾に「幡羅高等小学校」が設立されるなど、学校と家庭、地域一体となった教育環境の醸成が図られた。

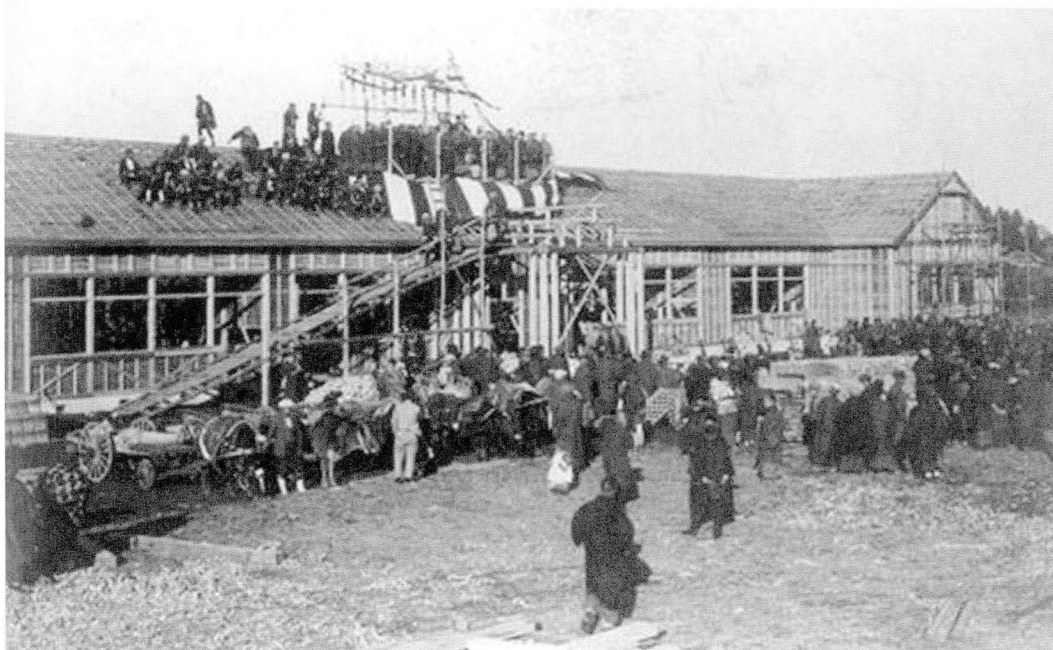
明治四十一年（一九〇八）、義務教育年限を六年間とする国家改革の中で、小学校は六年、高等科は二年となり、就学率は一〇〇％に近い割合まで上昇した。また中等学校や女学校への進学者も増え、高度な教育に対する社会的要望も高まりを見せた。この一方で、児童生徒数の増大に伴い校舎の新增築が急務となり、財源確保も大きな課題となっていた。

また、明治時代の後半には、県立熊谷中学校（後の熊谷高等学校）や県立熊谷農学校（後の熊谷農業高等学校）、県立熊谷高等女学校（後の熊谷女子高等学校）などが開設され、地域における教育や学術分野での拠点となった。当時は、初等教育以降の高等教育は各部門に分かれる「分岐型学校体系」が用いられていた。

大正から昭和にかけての教育分野の状況は、日本の軍国化という流れと共にしながら、熊谷でも教師の指導法や児童生徒の学習環境をいかに拡充させるかという探究が続けられていた。県内では江南の小林倭子などが近代教育の改革に向けて様々な施策を進めた。

戦後になると、新憲法に基づき平和的・民主的教育を前提とした諸制度の確立が進められた。学校制度の改革の中で、六・三・三・四制となり、戦前の分岐型から「単線型」へと画一化された。戦後復興から始まった熊谷の教育も独自の発展を遂げながら現在に至っている。（山下祐樹）

懐かしの学び舎



小原尋常高等小学校上棟式（熊谷市〈江南村〉・昭和3年） 大正12年に発生した関東大震災で2階建ての校舎の壁が崩れ落ちた小原尋常高等小学校では、昭和2年から3年にかけて旧来の校舎の一部を活かした増改築工事が行われた。予定地では青年団の草刈り奉仕や開墾の地ならしなどが進められ、昭和2年の9月に地鎮祭と起工式が挙行された。完成するまでは、仮校舎として周辺の寺院が場所を提供し、分散して授業が続けられた。同年12月に上棟式を開催し、翌1月に全工事が終了した。